集落の話の聴き手だより

第４号
2023.10

―方言を楽しむ―

「桃太郎」を方言へ

活動中の様子

動画で使用しているイラスト

私たちはカフェや地区のサロンにお伺いし、８０歳前後の方を中心にお話を聴いたり、「桃太郎」を方言に直していただいて動画に残す、という活動を行ってきました。
「皆様にとって、方言とはどのようなものですか？」お会いする方々にこう伺うと「日常だからよくわからない」「標準語だか方言だかわからず使っている」このようなお返事をまずされることが多かったです。
中には「『おめぇ』なんて失礼で言えないよ」「きつく感じると言われたことがある」「言葉が汚くなったといわれたことがある」といった感想や、「聞くとホッとする」「仲間意識を感じる」といった感想の方もいらっしゃいました。

「『桃太郎』を方言に直してください」とお願いすると、いぶかしげな表情をされたり、きょとんとした様子になる方が多かったです。ところが、実際に作業を始めてみると皆さんどんどん口数が増えていきました。
おばあさんが洗濯をする場面。「あんな大きなたらいを抱えながら、洗濯ものも持って、桃も持つなんて無理だ。洗濯ものびしゃるか」といった実際に体験されてきた方ならではのアレンジが出てきたり、話しているうちに「こんな言い方もしたよ」と新しい言い回しが出てきたりと、昔のことを思い出し、当時の出来事に花を咲かせながら、翻訳することを楽しんでくださいました。
動画を撮影する際には、緊張される方が多かったですが、練習もしていないのに、皆様お上手に読み上げてくださいました。いろいろな方にご参加いただき、個性豊かな作品が出来上がりました。

標準語を意識して話すことはあっても、方言を意識して話すことはあまりないと思います。
実際に活動に参加していただいた方からは「いろんなことを思い出しながら話せて楽しかった」「頭の体操になった」「緊張が刺激になった」等前向きな感想を頂戴しました。

活動をしていく中で「もっと色々な言葉を音声として残したい。より自然な語り口のものを残したい」と思うようになったので、今後はほかのテーマで聴き手活動をしている人たちに同行しつつ、活動の幅を広げていこうと思っています。
もちろん桃太郎もご要望があれば引き続き行っていきたいと思いますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします。
また、佐久穂町での生活や聴き手としての活動をしていく中で感じた南佐久の方言への想いを、コラムという形でnoteに掲載していきますので、ぜひそちらもご覧ください。

募集

現在の佐久穂町内で撮影された「古い写真」を募集中！

写真プロジェクトでは、この地域に暮らした方々の古い写真とエピソードを募集し、3月に茂来館にて写真展を開催します。
デジタル写真の存在とは違い、カメラも珍しい頃のものは、その時代を知るとても貴重な存在です。写真をお持ちの方はぜひご連絡ください。

時期　おおよそ大正12年頃～昭和30年代位

内容　日常的な風景や景色でも構いません
（どういったお写真かお話を聞かせください。）

さくほ集落の話の聴き手 公式note
https://note.com/sakuhosyuraku

活動進捗

「古い写真をたずねて活動紹介」

古い写真プロジェクトでは今年度、佐久穂町内で撮影された古い写真をお持ちの方を訪問させていただいてます。
記事にしても良いと許可をいただいた話を、偶然出会った同じ集落出身の方に活動紹介としてお話すると、「へ～知らなかったなぁ。」と、関心をもって聴いてくださいます。そして、そこから連想された、その方がご存知のこぼれ話をお話くださることもあります。一つのお話をきっかけに、その土地で暮らす人々が時代を超えて繋がっていることを感じさせられるとても素敵な瞬間です。そういった、人と人の繋がりのあたたかさを活動の原動力に変えて、回らせていただいており、感謝の気持ちでいっぱいです。引き続き情報をお待ちしております。

松井と人の暮らし

国道２９９号を大石区に向かって進む。石堂川にかかる堂川原橋を渡ってすぐ、右に曲がる。上り坂を２キロぐらい進むと、松井区の案内看板が見える。３つの沢に分かれた集落の世帯主の名前が書いてある。

東の沢の一番上の家に須田民恵さんが住んでいる。開拓者３代目の人と結婚して５０年。結婚した当初は３０軒の家があったが半分に減った。しかし、農業に従事する若い世代は増えた。大規模農家は８軒。そのうち、４軒は３０代から４０代の人である。民恵さんは結婚するまで農業経験はなかった。現在は有機農業で、３５種類の野菜を栽培している。農業は好きだけれど、それだけでは心が満たされないので、若い時から続けてきた合唱コーラスに毎週通っている。１０年ぐらい前から、水彩画教室に通い始め、自宅周辺にある自然の景色や花々を描いている。「人生は楽しむ」をモットーにしている。

松井区にある大規模高原野菜畑

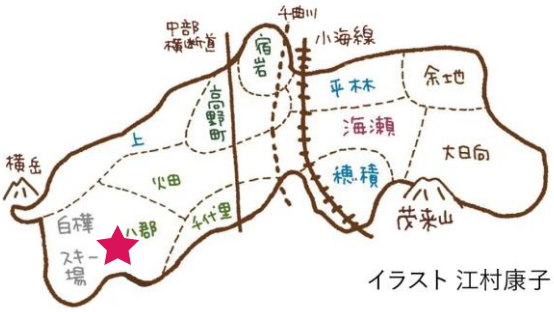

イラスト 江村康子

村田義一さんは２０年前に脱サラして、農業を始めた。仕事、仕事の毎日が嫌になり、土日でやる家庭菜園を始めた。たまたま、新規就農セミナーで旧八千穂村役場の職員と出会い、来てみた。いくつかの集落を見て回ったら、松井区が移住者に対する偏見がなく、温かく迎えてくれた。地域に溶け込む秘訣を尋ねると、「働く姿を見ていれば、村田さんがどんな人間か分かる。あんたは、松井の人間以上に松井の人だわ、と言われたことがあり、嬉しかった。それと、松井区の役員を積極的に受けて、一生懸命やった。」

今、松井には、「ええ風が吹いている」と関西弁のイントネーションで語ってくれた。「二人の息子も脱サラして、ここで、農業をやってます。それに、松井で生まれた子供も脱サラして、親と一緒に農業をやってる。それも大規模農業です。だから、今、松井は活気づいてます。」

「若い人たちは、冬場も別の仕事をしますが、私は１２月から２月まで冬休みをとります。一切仕事をしません。そういうライスタイルを続けています。」

高橋初江さんは結婚して６６年が経つ。「当時は、松井の農業といえば、稲作ばかりで、野菜を作ってる衆（しょう）はいなかった。家の前に道があったですよ。よくおばあさんが子どもを連れて、沢向こうの仲のいいおばあさんの家にお茶飲みに行ってた。」

「今は、そんなのん気する人はいない。松井に住んでよかったことは、空気がいいくらいっかな。今の人は車があるからどこへでも出かけられるけっど、私らの時は、バイクしかなかった。子供を学校へ連れて行くにも大変だった。だけんど、ある時この上の人が車を出してくれて、子供たちを学校へ送り迎えしてくれた。助かったな。お互い様の助け合いがあった。

野菜は大変だよ。夜明け前から仕事をした。前の日に今日は、１００箱、とか１５０箱とか注文を受けるもんで、それに合わせて出荷しなくちゃならないから、厳しかった。白菜の出荷は、今は、一箱４つだけんど、昔は、一箱６つだった。重くて大変だった。」

高橋初江さんの家の前にあった山道
（今は、草木が生い茂り、その痕跡すらない）

初江さんは松井に住んでいる女性では一番の年長になった。「週１回デイケアセンターに行ってるけんど、人には週２回でもいいでないかいと言われるが、とんでもない。家で、畑仕事をして体を動かしている方がよっぽどいい。」

（文責　西村寛）

集落の話の聴き手だより　第４号　2023.10

発行・問合せ：佐久穂町役場　総合政策課　政策推進係

TEL.0267-86-2553　〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地